

やくすえ あきら
弥久末 顕

世界の働く仲間とともに

● 基幹労連・事務局長

ご安全に。

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

皆様におかれましては健やかな新春を迎えられたことと思います。

日本の年末年始は、各地方の風習や伝統により様々な過ごし方がありますが、多くは31日の大晦日に年越し蕎麦で縁起を担ぎ、元旦には雑煮で祝い、お節料理に舌鼓をうちつつお屠蘇（日本酒）を楽しみ、神社仏閣に初詣し一年の安寧を祈願する、というスタイルが一般的ではないでしょうか。しかし世界に目を向けると、地域・国により新年（暦上ではありませんが）のスタートが必ずしも1月1日ではないことはご承知の通りだと思います。

ペルシャ暦が採用されている中東各国では、例年3月21日頃（春分の日）が新年であり、中国では旧正月春節（2018年は2月16日）を盛大に祝うことはよく知られています。

ところで、インドの正月はあまり知られていないと思います。インドではヒンズー教の新年祭りである「ディワリ」を盛大にお祝いします。例年10月中旬～後半に新年を迎えるそうです。

かつてインドの労働組合幹部から1月2日に普通に仕事のメールが届いた時、「お正月でも仕事か」と少々驚かされましたが、インドでは日本のような「正月三が日」的な伝統はないことを後で知りました。

2018年新年にあたって、「なぜインドか？」と思われる方も多いかと思いますが、

この機会に、基幹労連の国際貢献活動の一端をご紹介させて頂きたいと思います。

私たち基幹労連は、インドの労働組合、船舶解撤産業（船舶のスクラップ産業・船舶解体とも言います）で働く労働者を組織する組合であるSMEFI（インド鉄鋼・金属及びエンジニアリング労働組合連合）と2015年の年末から解撤労働者に対する教育支援の具体的連携をスタートさせ、丸2年が経過しました。今日現在も良好な関係を継続しています。

SMEFIとの連携の契機はインダストリアル・グローバルユニオン（以下IA）において、造船労組と船舶解撤労組が同じ部会を構成し、国際労働運動を推進していくことになった2012年に遡ります。

ここで、船舶解撤産業について簡単に紹介したいと思います。船舶解撤産業とは、老朽化しスクラップ対象となった船舶（概ね船の寿命は20年～30年です）を南アジアの国、特にインド・パキスタン・バングラデシュの業社に売船し、人海戦術により船舶を解体し、残余価値のある什器備品は中古品として売却、切り出された鉄板は建設用鋼材等へ再生するリサイクル産業の一端をなす産業です。上記の南アジア3ヶ国で世界全体の約70%以上の船舶スクラップを担っており、その方法は海岸にスクラップ対象の船舶を高速で乗り上げ、多くの労働者が直接、人力やガスバーナーで船舶を壊していく、と言う非常に危険な作業方法で行われています（ビーチング方式



と言います)。

この船舶解撤現場における労働環境は本当に劣悪で、南アジア3ヶ国だけで年間百人を超える労働者が災害で死亡しています。2016年11月にはパキスタンの解撤現場における爆発事故で27人の労働者が一瞬にしてその貴重な生命を落としました。まさしくILOが言う「世界で最も危険な仕事」です。小生もここ数年、インド・パキスタン・バンラデシュの船舶解撤現場を訪問しましたが、ガス切断の際の皮手袋やゴーグルもなく、ヘルメットも被らずサンダル履きで作業と言う、まさに目を疑うような環境下で、多くの労働者が危険を認識することもなく、働いている姿に驚きを隠せませんでした。

2014年長崎県佐世保市で開催されたIA造船・船舶解撤世界会議を機に、世界の造船大国である日本の責任として、「船の墓場」と称される南アジア、特に解体船舶量が多く、労働者の数も群を抜いているインド・アラン地区解撤現場の労働者に、国際貢献の観点から何が出来るのかをSMEFI・基幹労連双方で検討・協議を続けてきました。その結果、同地区に労働者向けのトレーニングセンターを建設する支援をすることになり、2015年12月21日に、3ヶ年プロジェクトとしてトレーニングセンター建設にかかる契約を締結するに至りました。プロジェクトは金銭的な支援とトレーニングに要する機材の支援を中心としています。

トレーニングセンターは2016年11月に完成

し、開所式も盛大に執り行われました。同センターは「アラン解撤労働者の家」と命名されました。もちろん、正面には基幹労連のシンボルマークも掲げられています。現在は、同地区で組織されている労働者を対象に、連日、安全衛生教育は勿論のこと、労働組合の必要性や組織、国際労働運動等、労働組合教育も実施されています。この貢献活動が一人でも多くの解撤労働者の健康と命を守る一助となり、当地において引き続き健全な労働組合が構築され、労働者とその家族が幸せな生活をおくることのできる、文字通り「労働者の家」として発展していくことを確信しています。

私たち基幹労連は、インドへの支援活動の他、タイ・カンボジアへのライブラリーカー（移動図書館）の寄贈や、ラオスにおける学校建設等、国際貢献活動を積極的に推進しています。

2018年がスタートしました。引き続き国際労働運動を考えるにあたっては、各地で繰り返される労使紛争を防止するために民主的かつ建設的な労使関係構築に尽力し、先進国・日本の労働組合の責任をどのような観点からいかに果たしていくべきか、を考えながら全体合意の中で地道に進めなければならないと思います。

この一年が、日本のそして世界の働く者にとって安全・健康で幸多い一年になりますことを心より祈念致します。